神戸の学童疎開～日誌・写真・記憶

Gakudo Sokai (School Evacuation) in Kobe－Dairies/Photographs/Recollections

洲　脇　一　郎
SUWAKI Ichiro

要旨：学童疎開については、おびただしい記録が残されるとともに、体験が語られてきた。本稿では、疎開日誌、写真という同時代の、日々の生活の記録の検討を通じて、神戸の疎開の実態を明らかにする。また疎開に参加した教員、児童の体験・記憶は、戦後10年位の時期には率直な表白があるが、その後時間の経過とともに次第に類型化していくように思える。疎開体験の変容を考える。

Abstract
There are numerous records and reports written between 1944 and 1945, that include firsthand accounts regarding the implementation of Gakudo Sokai (school evacuation). This particular article sheds light on Gakudo Sokai in Kobe by looking at evacuation diaries, photographs and recollections of teachers and students. The information found in the evacuation diaries and photographs provides us with an overall representation of the day-to-day lives of students. Additionally, full memories of these events were compiled after teachers and students recalled their experiences of school evacuations. As time has passed, these accounts have become similar and more stereotypical in nature. From the research gathered we can trace a change in the information contained in records regarding school evacuations.

キーワード：学童疎開、疎開日誌、整理される記憶、記憶の変容

はじめに

本稿は、「疎開日誌」、疎開の記録写真、後年になって編集された文集によって神戸の学童疎開の様相と「疎開体験」の変容を明らかにしようとするものである。「疎開日誌」は疎開に付き添った教員が日々記録したものであり、疎開生活の記録として客観性の高いものである。疎開の記録写真は、普通は児童の集合写真が多いが、ここでは新たに保存が見つかったアルバムにより児童の暮らしを紹介する。文字を読むだけでは疎開の生活は想像できない点もあるが、写真によって生活のディーテールまで知ることができることがある。記憶・回想は、疎開に参加した児童、教師等による記憶・回想である。「疎開日誌」には感想も含まれているが、基本的には客観的な疎開の時点での記録である。写真も撮影者の意図はあるにしても、疎開のありさまをそのまま写している。これに対して、記憶・回想は、疎開を振り返った時点での記憶であり、感想であり、印象である。疎開から10年、30年、50年と経過するに従って、記憶・回想は変容することがないのだろうか。本稿は、客観的、同時的記録としての「疎開日誌」「写真」の検討とともに、疎開関係者の記憶・回想の変容についても考えてみたい。(1)

1　疎開日誌

学童疎開の日誌は各寮・宿舎ごとに作成されていたはずである。しかし筆者が調査したところでは残存しているのは極めて少ない。日誌の内容を確認することができたのは、山手国民学校及び二

神戸親和女子大学　発達教育学部　児童教育学科

葉国民学校の二つだけである。志里池国民学校の日誌も所在が確認されていたが、現在は発見できていない。

疎開日誌は公的な目的のために日々作成されたもので、学校日誌の一種であるといってよい。疎開地や宿舎でどのような教育や生活をしていたのか、どのようなことが起こったのかなどについて記載している。(2)

神戸市山手国民学校では、250人が昭和19年度は岡山県久米郡稲岡南村の誕生寺に集団疎開した。誕生寺は浄土宗の開祖法然上人の生誕地として知られる名刹である。しかし１か所に250人もの児童を収容することに問題もあったし、20年度にはさらに疎開する人員も増加したため、分散疎開を実施することになった。誕生寺のほかに、稲岡南村の近傍にある弓削（ゆげ）、神目（こうめ）、打穴（うたの）の７か所を新たに疎開宿舎として提供を受けることになった。神目寮日誌は、神目寮及び神目中寮の日誌であるとみられる。神目寮は６年男子27名、付添教員は吉田友三郎、神目中寮は６年女子16名、付添教員は田中静子であった。それぞれの寮には寮母、作業員各１名が配置された。当時、吉田は34歳、田中は20歳であった。神目寮は神目中公会堂、神目上寮は神目公会堂が宿舎であった。２つの寮は近くにあり一体的な運営が行われた。

分散疎開に必要な受け入れの準備が整わなかったので、20年度に新たに疎開する児童もいったん誕生寺に収容した。６年生の児童が誕生寺から神目に向けて出発したのはようやく５月15日になってからである。日誌は、「日付」、「日誌」、「朝礼」、「課業」、「奉仕」、「献立」、「健康状況」、「其他」に記載欄が分けられている。

（雨中行軍、寮の運営の整備）

５月15日の出発当日は雨であった。「午前十時誕生寺発。雨中行軍。弓削附近で極めて難渋。午後一時半神目着。途中婦人会員の出迎。午後二時より受入式。式後、於住宅懇談会。上神宿舎で夕食（婦人会の厚意による赤飯）八時就寝。」現在のJR津山線でも誕生寺駅―弓削駅―神目駅でありかなりの距離がある。生憎の雨で行軍は苦労したようである。「弓削辺りで稍疲労の色見えたれども荷車を借りて、手回品積載後元気旺盛、到着後も事故なし。」昼食は弁当、夕食は「赤飯（筍　蕗　牛蒡）煮〆」であった。この日は誕生寺から教員や寮母の応援があった。

翌５月16日、６時起床、６時半に両宿舎において朝礼、児童には「明日からの奉仕について注意を与る。朝の奉仕夕の奉仕、村への感謝」を指導している。付添教員（吉田訓導であると思われる）は転入の手続きや挨拶回りを行っている。「農業会で米穀、蔬菜の供給を受く。役場へ転入届。綜合切符交付。但し現物のあるもの少し。宿舎暗幕設備。舎内外清掃、挨拶回り」児童たちは宿舎内外の整理整頓をし、除草や暗幕の設置を行った。

５月17日には駅へ挨拶。設備もようやくととのってきた。「川原に於て最初の朝礼（六・○○）」が行われた。山手国民学校の神戸前校長が来舎、前校長が作詞作曲した「神目寮歌」を贈られた。この日から授業が始まり、午前中３時限の授業が実施された。「奉仕」として道路清掃が行われた。５月18日、「森部落長と寮母の件につき要談。本日より上庄組合の有難き申出により、貰風呂をすることに決定、隔日三軒宛なり」。この日から「奉仕」として「風呂の水汲」が始まっている。上庄組合というのは農事実行組合（購買・販売・作業などの共同的事業を実施する農家小組合）のことである。この日、児童に手紙（郷里への第１信）を書かせた。

吉田訓導が村との関係づくりに腐心し、また奔走している様子がよく分かる。５月19日には「昨日に引続き雨、寮生稍疲労の気味。起床一時間延刻。上庄実行組合より薪（山の枯枝）を頂戴。小坂氏と井原氏を寮務手伝として御願ひすることを部落長と諒解」された。朝礼での指導は「村の方々の御親切に感謝」であった。集団疎開を受け入れる地元の協力がなければなかなか疎開の実施は困難だったのであろう。子どもたちにも感謝するよう重ねて指導している。また地元民を寮母や寮務手伝いとして委嘱して、地域と寮を結ぶ役割を果たしてもらおうとしたのであった。

５月28日、疎開の第２陣が到着した。「岡昇以下７名の男子を迎え意気軒昂なり」。

（課業と奉仕）

授業はおおむね午前中の２～３時間程度であっ

た。午後は作業の日が多い。授業は宿舎で行っていた。5月29日に初めて登校日があった。その日の朝礼では「登校開始について神目校生徒と仲よく」という指導が行われている。登校日には地元の神目国民学校で授業をするのである。疎開側と神目国民学校との取り決めがどうであったかわからないが、あまり学校には行っていないようである。神目では生活と学習の中心は寮舎であったのだろう。課業として授業のほかにしばしば薪取作業、農耕作業が課せられている。午前中は授業、午後は作業の日が多い。6月4日、5日に「草刈特攻期間」として草刈り作業に出動している。

奉仕として、道路清掃、水汲み、桑摘みなどを行っている。6月12日には「農繁期につき本日より神目校、学校課業中止。本寮も同調」とあり、麦刈りの手伝いを行うことになった。麦刈りは団体奉仕として児童が班に分かれて作業にあたった。「男女共班別農繁奉仕。漸く夏の気配。暑気強し」（6月20日）。麦刈り奉仕の時間は、日によって異なるが午前7時半～午后4時頃までであった。奉仕作業がない時は、自給農園での作業が待っていた。6月23日には、「朝来曇天、十時頃から梅雨模様。然し、八時より午后四時自給農園（上神菜園）の作業。茄子の移植、三度豆播種、南瓜」（6月23日）。この日の朝礼では「自給園の意義と本日の作業」が指導された。「九時より午后五時迄自給園（駅東ノ分）作業。掘返し、除草、茄子移植、葱、時□大根、不断草、牛蒡、人参の播種」（6月24日）。山や川原で開墾を行おうとしたようで、6月26日には「午後は星降山並ニ河原開墾選定地検分。星降二坪□開墾、極めて難作業なれども必遂を期す」とあり、29日にも「寺山の水田開墾作業の反省」が朝礼で取り上げられている。

麦刈が終わってからは田植えを手伝うことになる。農繁期の開始から授業は行われておらず、6月29日になってようやく授業の記載がある。

（託児所を開設）

6月13日、「農繁期出動中、特に病弱な女児で託児所開設せんと『子守いたします』ポスターを作製、目抜の場所に展示」とある。6月13日の1日をかけて女子はポスターを作製した。残念ながらこの託児所に子どもを預ける親がいたかどうかわからない。託児所の記事はこの日しかないからである。

託児所は実に非凡な着想だといわなければならない。戦時期に女子が労働に出なければならなくなり、都市部の工場には託児機能を持つ施設が設けられた。農村部でも託児所が設けられることになった地域がある。例えば兵庫県有馬郡の村でも託児所を設け、女子の就労を応援したのであった。有馬郡では戦後に託児所が幼稚園になっていった。

（付添教員、発熱す）

6月2日、「吉田訓導弓削町へ出張。西村主任と寮母、会計経理につき要談。帰寮後発熱（三十八度六分）」。吉田訓導は寮舎の開設以来、奔走していたがその疲れが出たのであろうか。6月3日も「病床」（午后三八度七分）、4日も午前中はさほど高熱ではないが午後高熱になる状態で「満州熱と思われる」と記している。5日には梶谷医師（弓削町の開業医で嘱託医）に往診してもらった。6月9日になって「殆ど平熱、食事平常復帰」になった。12日に「吉田訓導離床」とあって回復したのであろう。

（食事）

食事について日誌は毎日の献立を記載している。児童の感想がないので空腹感・飢餓感が直接的には伝わってこない。それでも献立を見るだけで貧しい食事が想像される。肉や魚が出るのはまれである。鯖の塩焼（5月25日）、川魚の塩焼・煮付（5月31日）（これは前日魚釣りに行って釣ったものらしい。）、鰆の塩焼（6月1日）、鰆（6月19日）、蝦（8月10日）、鮭（10月2日）位で、そのほか蛸や干いかなごがでるときもあった。（蛸もいかなごも主菜ではない）毎日の献立は、雑炊、粥、団子汁、馬鈴薯、南瓜、茄子、甘藷、筍などが主なものだった。来る日も来る日も馬鈴薯が続く日もある。（表1）

表１　献立の例（神目寮）

日付	朝　　食	昼　　食	夕　　食
７月１日	味噌汁（筍、三度豆）	味噌煮（筍）なます（大根）	マシュド（馬鈴薯、人参、三度豆）
７月２日	味噌汁（葱）	清汁（昆布、玉葱、筍）	五目飯（干いかなご、馬鈴薯、干大根、昆布、筍）
７月３日	味噌汁（玉葱）	煮物（うづら豆）	二杯酢（馬鈴薯）□いため（玉葱、青菜）
７月４日	雑炊（昆布、チシア、人参、馬鈴薯、干大根）	マシュド（人参、キャベツ、馬鈴薯）	煮物（馬鈴薯、筍）
７月５日	雑炊（干大根、馬齢薯、人参）	清汁（筍、キャベツ）	煮付（馬鈴薯、ささげ）
７月６日	味噌汁（馬鈴薯、筍）	煮物（馬鈴薯）	炊米（干いかなご、馬鈴薯、人参）
７月７日	味噌汁（干大根、馬鈴薯）	煮物（馬鈴薯）	煮付（ささげ、馬鈴薯）
８月１日	雑炊（馬鈴薯、牛蒡）	煮物（馬鈴薯、南瓜、葱）	代用食（馬鈴薯）
８月２日	粥（馬鈴薯）	煮物（馬鈴薯、葱）	代用食（馬鈴薯）蒸パン
８月３日	雑炊（馬鈴薯）	マシュド（馬鈴薯）	代用食（馬鈴薯）
８月４日	雑炊（馬鈴薯）	煮物（馬鈴薯）	代用食（馬鈴薯）
８月５日	雑炊（馬鈴薯）	炊米（馬鈴薯）	団子汁
８月６日	雑炊（馬鈴薯）	炊米（馬鈴薯、人参、牛蒡）	代用食（馬鈴薯）
８月７日	雑炊（馬鈴薯）	代用食（馬鈴薯）	巻ずし

それでも祭りの日など特別の日に献立に工夫がこらされたようである。９月21日は月見でおはぎ、10月20日は地元の志呂神社の祭りで昼食には「ばらずし」がでた。

山手国民学校の「疎開記録」は「野菜の供出も日々村から受け」「村民から愛撫され果物等の慰問も度々受け」たと記している。

（児童の健康状態）

「疎開日誌」の期間が５月から10月であったこともあってか児童の健康状態は比較的良好であったように思われる。それでも発熱、胃腸障害などがしばしば見られた。山に行って「ウルシ負け」で顔に発疹ができたケースもあった。「疲労熱」「大腸カタル」「扁桃腺」「淋巴腺がはれる」などの記述もある。寮母の付添で梶谷医院まで通院させた児童もいた。６月７日には梶谷医師が寮に来て、午前中に身体検査、午後は健康診断、腸チフスの予防接種が行われた。８月３日には津山保健所の衛生指導員の訪問があった。

虱の記述はないが、ノミ退治の大掃除のことが記されたり、蚊帳を調達できたりしたことを喜んでいる（７月23日）。

（空襲―神戸と岡山）

６月２日に「大阪空襲の報あり」、６月５日の神戸については日誌に記載がなく、９日になって「神戸空襲（五日）の情報追々入って来て、童心動揺の模様なり。情報の統制を図る必要あり。打合す。散髪屋さん、坂田操さん、小坂親戚、神戸より帰村の模様なり。その報区々。」とあり、朝礼では神戸空襲について詳しいことは分かっていないと児童に話したようである。６月10日、「神戸空襲罹災状況調査の為、田中訓導帰神に決定」、児童には「空襲問合せの手紙」を書かせることになった。しかし翌11日、「田中訓導留守居全焼して母堂、家族を連れて来村、一先づ公会堂に落着く。村松寮母帰神」という状態で田中訓導の帰神は中止になった。この日児童には空襲の状況をやや詳細に語ったようである。神戸空襲の模様がさらに判明するのは６月14日に山手国民学校の三浦訓導が来て話したためである。「神戸空襲詳報始めて分かる」と日誌は記している。

６月22日の小麦刈団体出動の２日目、「十時過

ぎ、岡山市、倉敷、呉方面に空襲。爆弾炸裂音、震動物凄く作業中止」した。爆撃音と振動をもたらしたのはおそらく岡山市の空襲であろう。6月29日、岡山市への地域爆撃が行われる。「岡山市今暁空襲、相当の被害ある模様、汽車時刻乱調」。大都市や軍需工場のある都市だけでなく、地方都市への無差別爆撃が始まっていたのである。

（保護者の空襲死～「共に悲しみ共に語る」～）

6月14日、「三浦訓導本校より連絡に来る。突如栗坂貞子父俊治氏空襲により死去の旨聞かされ、その遺骨並に遺品手交さる。」三浦悦哉は残留教員の中心であった人物である。吉田訓導は困ったと思ったに違いない。子どもにどう伝えるのか、葬儀をどうするのかなどが胸に去来しただろう。それが「突如」という言葉に表れているような気がする。1日間を置いて6月16日「栗坂招致、父逝去の事情を聴かす。夕刻迄共に悲しみ共に語る。遺産（現金）農会へ預金」。17日には朝礼で「栗坂の父死去について」子どもたちに話した。「栗坂の慰霊祭について役場、農会、学校訪問、要談」した。翌18日、「龍泉寺、泰成寺訪問、栗坂亡父慰霊祭の件につき依頼。折よく妙福寺和尚、泰成寺に集会、御両人の快諾を得て明午后三時より慰霊祭執行に決定」した。朝礼では栗坂の父の死について「悲嘆を憤激に、憤激を増産に」という話をした。19日は「午前中上神目寮整理整頓、午後1時祭壇準備、午後三時慰霊回向、午後五時四十五分遺骨泰成寺へ」という段取りで慰霊回向が執行された。式には、村長、農会長、同副長、婦人会長、部落長らが参列した。さらに7月8日には寮葬が営まれた。児童も動員して準備、3時に告別式で、これにも村長、農会長、国民学校長らが参列した。空襲死に対して手厚く葬ったと思われる。吉田訓導の努力によるだろう。

（聖戦完遂と敗戦）

戦局が悪化するにつれて、朝礼でも戦争の状況、児童の在り方が話される。6月27日「沖縄戦最後の攻撃について」、6月28日「沖縄の同胞につづく生活」、7月2日「本土決戦は我が絶対的勝機なり」、7月3日「特攻隊より戦災児童へ」、7月20日「学徒隊の結成について」、7月24日「機動部隊本土近接と艦載機に対する注意」などである。

日誌は7月21日から主に若い田中訓導が記録するようになった。8月15日にはこう書いている。「日本人としては信じられない。米英支ソの四国に降伏した事が発表された。憎しさ（ママ）の為皆泣く」。16日の日誌は「考へられない。敗戦国日本。何の為疎開生活だろう。今日からは何の目的もない。児童も心が落着かない」と述べる。若い訓導として率直な感想を語っている。吉田訓導は何も書いていない。17日には神目校で詔書奉読式があった。終戦の詔勅が奉読されたのであろうか。

神戸市内にわずかばかり残されている「学校日誌」でも、8月15日の感想はさまざまである。悲憤慷慨型もあれば茫然自失型もある。感想を述べない沈黙型もある。公的日誌の性格から制約もあったことも考えられるが、田中訓導は思いを素直に述べている方だろう。

神戸市の学校の例を示そう。西郷国民学校の「学校日誌」は8月15日、「正午重大放送アリ（四ケ国共同宣言受諾）」と記すだけである。翌16日、「朝会時ニ校長ヨリ大東亜戦争終結ニ関スル訓話アリ」。20日には「校長会指示事項ニ関シ校長ヨリ伝達並ニ指示あり」とある。校長会として詔勅への対応を話し合ったのであろう。

（娯楽や行事）

疎開生活には子どもの楽しみも必要だったに違いない。日誌には、課業や奉仕ばかり目立つが「星降山に遠足」（5月23日）、「山王神社上棟式に参列、十二時必勝祈願祭、終って餅撒き、全て八十七個拾ふ。終って部落女児の舞踊」（5月25日）。吉田訓導は「折柄敵機B公飛来せるもその下で悠なる農村情緒満喫誠に楽しき半日なり」と記した。5月27日の海軍記念日には志呂神社を参拝し総合訓練、疎開完遂祈願などを行い、夕方に「五月の誕生会」を開催した。5月30日には男子総出で「魚とり」を行い、漁獲はバケツ2杯だった。「幻燈とお話しの会」が7月22日に開かれている。8月9日から神目校の講堂で映画、これには村民も多数参加した。8月13日には「七夕様」。8月23日、24日に「英霊巡拝」した。「遺族の方々は涙を流して喜で（ママ）下さる」。9月21日には「月見の用意、花等裏山で集めおはぎをして、お

月様の出るのをまってゐたが、曇ってとうとう出ずだった。」

（子どもの引き取り）

日誌には子どもの引き取りの記事が散見される。親が引き取りに来て、縁故疎開させるケースである。７月17日（父に連れられ滋賀県へ）、７月20日、７月30日、８月４日、８月６日、８月19日（姉が連れられ広島に）、８月31日（広島に）といった記述がみられる。

（帰心、引き上げ）

敗戦後も水田の草引きなどの作業の日々が続く。８月25日、「神戸へ帰へる（ママ）用意の為午前中は洗濯日。シーツ、枕カバー、寝巻等洗ふ」と初めて帰神の記事が出る。午後には作文「神目の思ひ出」を書かせた。８月28日、「いつ帰へれと言はれても困らない様荷物の整理。荷札の用意を行ふ」。若い訓導は帰心矢の如しである。９月３日、「神戸へ帰へる時に米袋とする為二枚位袋を縫はす」。自給園で栽培している稲を収穫して神戸へ持ち帰ろうと考えたのだろう。しかし疎開からの引き上げは都市の混乱を危惧した政府からストップがかかる。神戸へ帰ることが再び日誌に表れるのは、10月10日に「『神目をさらば』劇練習」の記述からである。11、12日にも劇の練習を行った。13日には疎開の記念の写真として男子寮、女子寮、学校、川原の４枚を写した。22日志呂神社のお祭りに参加後、地元の家に招かれ夕食をご馳走してもらった。22日劇の練習、23日荷物整理、24、25日稲刈り、25日お土産の草履作りを行う。26日家に手紙を書く。27日、メリケン粉（小麦粉）を入れる紙袋を子どもに作らせ、その袋にメリケン粉を入れてやる。子どもは嬉しそうに袋をリュックに詰めていた。28日、焼米１袋ずつ土産に持たせる。29日、餅つき。これで疎開日誌は終わる。練習を重ねた劇はその後に披露されたのであろうか。

山手国民学校の「疎開記録」によれば、帰神は11月２日であった。午前６時ごろ乗車し、午後２時半三宮駅に着いた。駅頭には親兄弟が出迎えた。教員は「無難に責任を果し肩の荷を下した感じであった」と述べる。６年生は１年余りの疎開であったが、神戸で一人一人にはどのような状況が待っていたのだろうか。[3]

２　写真が語る学童疎開

長楽国民学校は兵庫県出石郡出石町に集団疎開した。妹尾河童『少年Ｈ』の主人公の妹は長楽国民学校に在籍していた。妹は集団疎開には参加せず両親の出身地である広島県に縁故疎開する。時期は不明であるが、「長楽国民学校“疎開ノヨイ子達ニ贈ル”回覧」というタイトルが付せられた１冊のアルバムが長楽国民学校に寄贈された。寄贈者は「出石鶴影会員」である中易文亮及び荒井孝一の両氏で、アルバムはこの二人が撮影したものであり、1944年９月から45年３月までの疎開児童の記録写真であった。

長楽小学校は児童数の減少のため2005年に二葉小学校と統合され駒ヶ林小学校となったが、長楽国民学校の集団疎開に関する記録はまったく保存されていない。『出石町史』によれば、宿舎は男子が福成寺・勝林寺・願成寺で、女子は経王寺・本高寺・出石高等女学校であった。後に昌念寺も女子の宿舎となった。『神戸新聞』の記事によると、まず８月26日に６年女子44名が本高寺に向け出発、29日に５年男女、６年男子125名、９月１日に３年、４年男女129名が出発した。合計298名である。

児童の写真を撮影したのは、出石で酒造業を営んでいた中易交亮氏と出石町役場で疎開係主任を務めていた荒井孝一氏であった。全76点が保存されているが、紙幅の関係もあるのでいくつかを紹介するにとどめる。なおアルバムに付せられたキャプションは「　」で示した。

アルバムの最初は疎開10日目に撮影された児童と疎開関係者の集合写真である。「神戸カラ疎開シテ来テ今日デ十日目！　オ父サンオ母サンニ早速各寮ノ和尚サンヤ寮母サント一緒ニ元気ナ私達ヲオ目ニ掛ケマセウ」と説明されている。本高寺組（女子）、福成寺組（男子）、勝林寺組（男子）、経王寺組（女子）の写真である。いずれも境内や門付近で撮影されたものである。

10月15日に「出石町秋祭“だんじり”かつぎに共に加って」が撮影されている。地域の厚意で疎開児童も祭りに参加させてもらったのであろう。

どの地域でもそうだが、地域のさまざまな行事に疎開学童が参加させてもらっている。（写真１）

10月21日、「出石町外出石神社祭ノ日ニ　町外鳥居橋下ニ於テ」「楽しい遠足ノ一日」。出石神社の祭礼の日に鳥居橋まで遠足に出かけたのであろう。出石神社、鳥居橋は出石の町の中心からすこし離れた場所にある。リュックサックを背負って川の堤防にあがる子どもたち。水辺で遊ぶ子どもたち。「十月廿一日　遠足ノ日川原デ先生カラ出石ノ歴史ノオ話ヲ聞ク」という説明がある写真もある。疎開生活に変化を持たせるとともに、地域に馴染ませようとしたのであろう。

写真１

写真２

写真３

大根を運ぶ子どもたちが撮影された写真もある。勝林寺組の児童が寺に大根を運んでいる。大根は誰かにどこかでもらったのだろうか。「今夜ノ御菜ハ大根ダ!」というキャプションがついている。（写真２）

「マア！　丈夫ソウニナッテ…」。福成寺の境内での面会の光景である。10月21日の写真である。学童疎開の写真で面会の光景を写した写真はめずらしい。母親が弟妹を連れて面会に来ている。面会は一方では様々な問題を伴っていた。（写真３）

本高寺で写された写真がもっとも多い。撮影者の一人である中易氏の住居と近いという事情もあったのかもしれない。神戸へ手紙を書く子どもの写真がある。「神戸ニ便リヲ（本高寺）　オ母サン！　私達ノ寮ハトテモ静カナ美シイオ寺デス　神戸ト違ッテ御野菜モウント戴ケマス」。神戸の親を安心させるような手紙を書いたことであろう。（写真４）本高寺の階段で勉強する子ども、境内で手をつないで遊ぶ子ども、蓄音機で音楽を聴く子ども、盥で洗濯をする子ども。疎開生活のさまざま場面を写している。

男子では福成寺で男子児童が体操をしている写真がある。上半身裸だ。10月の撮影。勝林寺ではチャンバラで遊ぶ子どもたちが写されている。どちらも境内での撮影だ。『出石町史』によると、

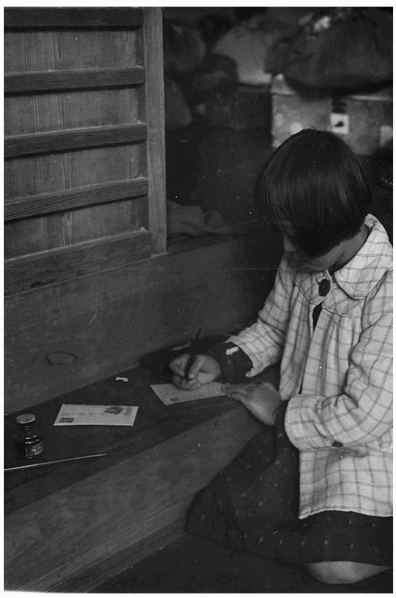

写真４

子どもたちが宿舎を出て町中で遊ぶことはなかったという。

10月下旬に本高寺で撮影されたのは開墾の光景である。「本高寺境内ノ魚屋区婦人会苦労開墾ノ畠ヲ譲リ受ケテ鍬ヲ振リ上ゲル僕等ノ自給農園」。開墾の写真は２点が写されている。

「始メテ鍬ヲ持ツ僕等ダガ…ウント耕シテウント作ロウ」。地元の斡旋で土地を貸してもらったのであろう。開墾作業を行っているのは男子なので、他の寮の児童であろう。（写真５）「行学一体」の掛け声のもとで、どの疎開地でも農地の確保が行われたが、出石は土地も狭く自給園の確保には苦労したであろう。

アルバムは秋の疎開の模様から、一転して２月上旬の大雪の中の登校風景になる。「雪中ノ登校　降ッタ雪ハ約二尺　屋根カラ落チタ雪ガ亦大変ナモノデシタ　二階ノ窓ニトドキソウナ程ノ雪デシタガ　デモ誰モ皆雪ニハ負ケズ元気デス」。この年は地元の人からみても大雪だったのだろうか。地元出石町の弘道国民学校へ登校する日だったと思われる。登校だけではない。宿舎の寺院は冷え込むので冬季の防寒対策は大変だったに違いない。（写真６）

３月になると神戸に帰る児童の記念写真が撮影されている。願成寺寮、福成寺寮及び本高寺の写真は雪の上での記念撮影である。勝林寺寮、経王寺寮も撮影されている。６年生の卒業にあわせて撮影されたものか。卒業する６年生は出石町役場の前で男女別々で撮影されている。（写真７）

「卒業シテ神戸ヘ帰ヘル　兄サン姉サント一緒ニ撮ッテモラフ最后ノ記念　20年３月末」。キャプションでは３月末となっているが、撮影時期はもっと早く３月の上旬ころであろう。福成寺寮、本高

写真５

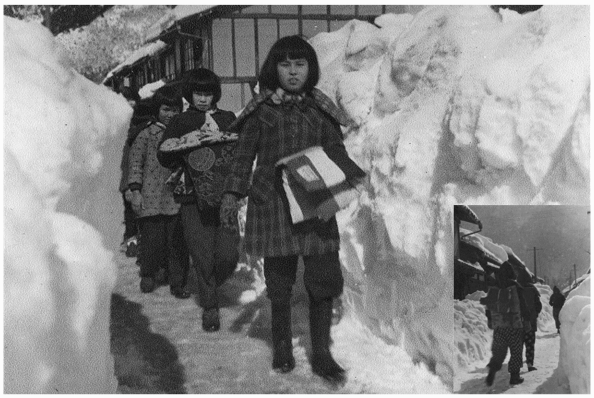

写真６

写真７

寺寮の写真もある。付添教員、寮母の写真も撮影されている。

3月、6年生はいよいよ神戸に帰る。写されたのは神戸に帰る列車での光景だろう。子どもたちは楽しそうに見える。列車の窓から顔を出した子どもたち。しかし3月17日の空襲に遭うことになるのだ。長楽国民学校の地域の空襲は『少年H』に詳しい。（写真8）

写真8

列車の写真の後に本高寺での生活の模様の写真がある。「本高寺寮ノ或ル日曜　　早春ノ光ガ山門カラ流レ込ミ春近シヲ思ハセル　私達ハ長イ冬籠リカラ開放サレテ陽光ヲ浴ビル」。また別の写真では「本高寺寮ノ早春ノ或ル朝　　春トハ云ヘ未ダ一寸冷イ　焚火ヲ囲ンデ神戸ノ空襲ノ話ヲスル者モアル」とある。春の光を浴びながらも空襲の不安が児童を少し憂鬱にさせているように思える。水汲みの写真もある。

撮影時期は分からないが、音楽会の写真がある。場所は弘道国民学校の講堂であろうか。

消費地である出石での疎開は、食料や薪の調達などに必ずしも容易ではなかったであろう。『出石町史』は近在の村から食料調達に努力したことを記すが、「児童は神戸の親を恋しがりその上空腹も加わってあまり元気がなく、本を読んだり日なたぼっこをしていることが多かった。」と述べる。このアルバムは、暮らし、遊び、開墾風景など疎開児童の日常生活を写している点で貴重であろう。写真は1945年3月までの撮影でそれ以降のものはないように思われる。なんらかの事情で撮影が困難になったのであろう。[4]

3　記憶・回想の中の学童疎開

小学校の周年事業の際に、あるいは疎開10年、30年、50年などの節目の時に文集が編集された。児童を引率した付添教員、疎開に参加した児童、集団疎開を受け入れた地域の人々、保護者などによって学童疎開が語られてきた。文章を書くことを専門とする人でなく、平生あまり書いたことがない人々が手記を書いているのである。多くの思い出・回想は当時のことをきちんと調べて書いたというよりは、記憶に残っていることをそのまま手記に書いたという印象を受ける。丹念に事実を調べ上げて、学童疎開の意味づけをして、自分の体験を述べる、というわけではない。教員にしても、当時の体験をそのままに語っているように思われる。

しかし、時間の経過とともに、記憶は変容しているようにも見える。特に印象に残ったことが大きく思い出され、ほかのことは記憶からは消えっていってしまうような印象さえある。そして記憶が整理され類型化していくように感じられるのである。

（1）戦後10年前後～赤裸々な表白の時期

まず戦後10年前後に編集された学校の記念誌に収録された学童疎開の思い出を検討したい。最初に志里池国民学校の昭和32年に編集された記念誌をみる。城崎郡清滝村で疎開主任として勤務した教員は「一年有ケ月家庭を顧みる暇もなく、家財の一物をも疎開させず、只々百二十余の幼い者の身と魂の育成に寝食を忘れて努力したのであります。知らぬ他国でしかも生活環境の激変のため、殊に食糧事情の悪化のため、子供達の健康保持と体力の増進については一方ならぬ苦心と心遣いをいたしました」と語る。そして疎開主任の人選で感情のもつれがあったことを明らかにする。本来疎開主任として赴くべき人物が家庭の事情を理由に主任を固辞し、彼に疎開主任を押し付けたのだという。しかし、神戸に残ったその教員は3月17日の空襲で焼夷弾によって妻とともに死んでしまう。息子も重傷を負った。「あの時、今一歩進めて、なぜもっと強く説得しなかったのか、前途有為の先生の一家を全滅させたことはいつになって

も、私の責任のように感じられ」と述べる。付添教員の決定について、さまざまな事情があったことが窺われる回想である。

同じ学校の児童の記憶。「翌年になると、食糧事情が段々悪転しかけてきた。雪の解けた神鍋山に私達は、ぜんまい、わらび、ふきなどの野草を摘み、薪取りに山中を走り廻った。皆、飢えていた。勉強どころではなかった。皆が話している事も、考えてい（る脱か）事も、すべて『食べる』ことしかなかった。…一人の寮友が栄養失調も手伝ってか、急逝した時にも彼の死に対して私達は冷淡であった。何事も自己本位に考えていたから、寮友の死を悼む心の余裕など持ち得なかった。」赤裸々な告白である。友だちの死を悲しむ気持ちさえなかったというのである。前述の教員も、「初夏の候の桑の実、秋の生栗による胃腸障害と吹出物には全く手を焼いたものでありました。」と語っているように、飢えに苦しむ子どもたちは口に入るものはなんでも食べたのだろう。(5)

真陽国民学校の校長はこう語っている（昭和31年)。「昭和十九年九月、四年以上の児童は、香住、浜坂、湯村の三地区に疎開することになった。初めは地区の人々にも可愛がられ、食糧もかなり恵まれた上に、時間的生活をする為か、体重も増し、父兄をして愁眉を開かせたのであったが、終りに近い頃食糧も前の様にはいかず、その上に皮膚病が伝播して寮母や付添いの教員を困らせたと同時に児童の体位も落ち、涙をさそう姿も逐次増加して来た。校長は毎月一回巡回するのであるが、帰校の間にも色々と事故が起きると電報が来る。宿舎規則を破って一人でこっそり寮を抜け出し、椎の実を取りに行って、あたら命を失った子供を出した時は我子を失った様な熱い涙が止まらなかった。」と語る。食糧事情は1945年になると44年に比べると一層深刻になり、地域として疎開児童への配慮が困難になってきたのであろう。子どもの悲劇はそうした食糧事情の中で発生した。この校長は、空襲の際には、「校長だけは奉安庫の前にすわって御奉護申上げ、万一の場合は御真影と共に砕けるのが当然の事として覚悟していた」と述べるような、皇民教育を至上と考える人物であった。

真陽国民学校の教員はこう語る。「四寺院に分かれていましたが、食糧難に悩みました。主食はナンバに米少々ということで疎開中ずっと下痢のし通しでした。ことに副食に困りました。有名な漁港でしたが魚が月１回しか配給がなく野菜の乏しい所で私は何とかしたいと自転車に乗って遠くへ買出しに行ったものです。子供がかわいそうでかわいそうで、いても立ってもいられぬ毎日の連続でした。」(6)

陰鬱な記憶ばかりではない。1945年に鳥取県内で再疎開した川池国民学校の児童は、いなご捕りも愉快だったし、いなごを焼いて粉にしてご飯にかけると風味満点だったと回想する。村人の人情も厚く、「疎開生活は全く恵まれたもの」だったと語るのである。もっとも、いなごには辟易としたという記述は別の学校の記録にあるが。(7)

次に疎開に関係した教員の座談会を紹介しよう。1953年に開かれた雲中国民学校の疎開当時の校長や教員等（教員の多くは、座談会の時には校長に昇任している）による座談会である。付添教員の人選であるが、これについては別稿で述べたのでここでは紹介しないが、各宿舎の教員の配置は「先生のコンビ」や「現地の町長の性格」を見て割り当てた。

雲中は３か町に分かれて疎開することになったが、３か町ともそれぞれ地域に中心となる協力者がいたことである。宗教団体、高松稲荷、町長がそれぞれ協力してくれたことが「雲中の疎開が成功した大きな理由」であったという。学校側では、「小黒板、ミシン、白墨、インキ、えんぴつ、それから炊事の鍋釜、食器、小道具に掃除用具と、あれだけ用意した集団はないだろう」というほど、事前準備に念を入れた。しかし「雲中の子は父兄の社会的地位も高く、甘やかされて育つていた。…こんな子が親を離れて疎開生活をするのだから、色々気苦労が多かった」。雲中では、「現地奉仕」といって、奉仕を兼ねて親の面会があった。親は物資を持って疎開地に行き奉仕作業をして帰るというシステムであった。校長は「子供の世話になっている土地の物資を買つて帰るな」と父兄に注意していた。教員はこう自慢もしている。「ある時、高田先生の授業を向こうの先生に見てもらつたこ

とがあつた。子供の実力がかくだんの差だね。」しかし付添教員は疎開教育と「田舎の教育」の差を理解するよう校長から指導されていた。地元の町長も疎開教育の悪口は一言も言わなかったのである。食料の確保はどこでも問題であったが、同じ学校の疎開でも宿舎のある地域によって差があった。「真金は三ケ町で一番食糧の足らん土地だつた。足守町に依存せねばならんので、頭の上らん集団だつたよ」。同じ学校の疎開でも、宿舎のある地域によって食料事情に差があったことはさまざまな回想で語られている。

疎開のプラス面について、ある教師は「疎開は再び繰返したくはない、いまいましい思い出ではるが又一面今日の学校教育では期し得ない人間教育も出来たと思う。魂と魂のふれあう師弟一如の教育だつた」と述べている。40年、50年後にはあまりみられない率直な感想である。[8]

（２）戦後40～50年～「整理される記憶」

戦後40～50年を経過した時期に多くの学童疎開記録が刊行されている。疎開児童が50～60歳前後になり、疎開を振り返ってみる余裕もでてきたのであろう。疎開を共にした同級生による文集も編まれるようになる。ここでは紙幅の関係もあり代表的な刊行物を紹介する。

まず1992年に編集された『西須磨小学校百周年記念誌　西須磨の年輪』である。よく調査をした上で編集しており、学童疎開を扱った周年誌では白眉といえよう。縁故疎開や残留組についてもヒアリングを行っている。

「転校したその日、履いて行った運動靴が盗まれ、下駄箱に残っていた“わらじ”を履いて、三十分もかかる田舎道を歩いて帰ったことがありました。」いきなり洗礼を受ける。「縁故疎開といっても、こちらから無理に頼みこんだ形だったので、あまり歓迎されずその日から子供心にも肩身の狭い遠慮勝ちな暮らしが始まった。…同じ神戸から疎開してきた人達とはすぐ仲良しになり、担任の先生も優しくしてくださったが、地元の子供達には、なかなか馴染めなかった。“疎開の子”“都会の子”と、風当たりがとてもきつかったからだ。作業ができないのに学力だけが進んでいることが反発をまねいたのだろうという。

残留組については、地区別に10か所で「学舎教育」が行われたこと、「一年生から六年生まで一クラスで勉強していた。…殆ど自習していた。」という。

集団疎開は岡山県邑久郡、赤磐郡で受け入れてもらった。1945年度の疎開宿舎は10か所に及ぶ。疎開児童、付添教員が参加して座談会を開いている。

疎開児童の生活は、受け入れ町村や宿舎によって差があるようだ。「私達は意気込んで行ったのだが、きちんとしたところがなく、建設的なところもなく、何か退廃的な感じで乱れていた」や「分宿（里親）は全くなかった。寺の外で地元の人達と仲良くすることも無かった」、「良い思い出、楽しい思い出、懐かしい思い出などは何一つ無い。辛い思い出ばかりだ」という記憶がある一方、恵まれていたという思い出があり、地元の民家に行き、風呂に入り、握り飯など食べさせて貰ったという記憶もある。正月には１軒に２人ずつ分宿させてもらった宿舎もあった。２年生で疎開に参加した者はいう。「自分は幼少で辛いことばかりだった。神戸へ帰ってきた時は頭だけの栄養失調児だった。…どんな時にも耐えてゆける力が疎開の経験で培われた」

辛かった作業として、ある宿舎では水汲みがあげられている。山の下の井戸まで水汲みに行き大八車を引いて帰る作業である。

1945年の１月、２月は寒かったという。岡山気象台で調べたら平年より２度程度低い年だった。西須磨校の疎開地は岡山県南部でまだ寒さはましだったと思うが、例年になく寒い年だったのだろう。

座談会の司会者は、受験勉強に話題を向けるが、児童からはうまく話が出なかった。あまり勉強しなかったという話ばかりである。1944年度の６年男女は進学の問題を抱えており、保護者の関心事でもあったのだ。付添教員は「終日、学校に住んでいた訳だから、結構勉強もしていた。」と述べて、司会者を応援している。

女子は虱が頭髪にもわいたので、しょっちゅう寮母に髪を梳いて貰った。教員は虱のほかに、疥

癬も深刻だったという。食生活については、「途中から殆ど代用食即ちジャガ芋、南京等のみのことが多くなった」「薬屋で『ワカモト』（筆者注…消化剤）を買っておやつ代わりにした」「最初は米飯だったのが粥になりジャガ芋にと段々悪くなった。歯磨粉を食べたこともある」。座談会の最後に、疎開児童の不満に対して引率教員の経験者はこう語っている。「子供はまず自分のを見て、次に隣のを見る。それは当然の心理です。『隣の花は赤い』という諺があります。あのような異常な状況の中では、特にそれがひどかったと思います。私は関係者の皆さんが、公平に、精一杯やって下さったと信じています。…私は決して戦争を謳歌する者ではありませんが、貴重な体験だったと思います。」筆者にはこの教員は、疎開関係者の苦労も知らない参加者をたしなめているように思える。

司会者はこのほか脱走や吉井川の決壊（45年９月）、恩賜のビスケットなども話題にしている。司会者は集団疎開で出そうな話に持っていこうとしている。司会者自身が集団疎開はこういうもだという「整理された記憶」に基づいて発問しているように思える。

『西須磨の年輪』でもっとも印象に残るのは、空襲で一家６人を亡くし孤児になった人の話である。「父母、私、四人の弟妹（やがて生まれる赤ちゃんを含む）の七人だった。…母の実家（土山）への疎開が可能でありながら、勝気な母は頑としてその道を選ばなかった。」６月５日の空襲の後、何度も家に手紙を書いたがまったく返事がない。少し変だと思う。やがてすべてのことが知らされる日がくる。その前から先生の児童に対する態度で何かを察していた。知らせに来た伯父の顔を見てすべてがわかった、と語る。お嬢さんと呼ばれていた日々は去ってしまうのである。「あの戦争末期に家族全員を失って唯一人とり残された小学六年の女の子が、戦後の激動期を生き抜くには、どれだけのことに直面しなければならなかったか、到底わかってもらうことはできないであろう。」この手記を書いた人はおそらく45年間の歳月があって初めて心情を吐露できたのかもしれない。悲惨すぎる体験を語るには一定の時間の経過が必要なのかもしれない。[9]

次に山手国民学校の1945年３月卒業生が綴った文集『楠の木陰で』（1995年編集）をみよう。昭和19年度に６年生だったため会の名称を「山手一九会」にしている。集団疎開の参加者だけでなく、縁故疎開者も寄稿している。また内容も必ずしも疎開に限っているわけでなく、空襲や国民学校時代の思い出もある。集団疎開先は前述のように岡山県稲岡南村の誕生寺である。

まず縁故疎開者から。伯父夫婦のいる大阪府の守口へ疎開した女子児童は、「新しいお友達は皆親切で神戸から来た私に色々と教えてくれました」といい、校則で素足だったためしもやけになって大変だったという。「女学校進学の為に夜は遅く迄一人で勉強するのが又大変です」と灯火管制の中で受験勉強した思い出を語る。虱にも悩まされる。毛虱がつき、学校から帰ると板の間に新聞紙を広げて「スキ梳」で髪の毛を逆さに梳いたという。祖父母宅に疎開した女児はいう。「言葉や来ている物が違うので田舎の生活は何かにつけて白い目で見られて居ました。…城下町でもあり田舎の町は因習にとらわれて住みにくい事が多くありましたが何事にも善意に解し、めげる時は神戸魂を発揮させ、いろいろな事を皆さんに教えられたと思って今では感謝あるのみです」。この女児は戦後もずっと疎開地に住み続けている。

残留組の思い出。ある女児は「昭和19年春、いよいよ私達も最上級生となりましたが、伊勢への修学旅行も当然取り止めになるという世情でした。…又、多くのお友達は集団疎開をする事になりましたが、身体の弱い私は受け入れられず、地方に縁故もないまま残留組となりました」と書いているが、体の虚弱な児童などは集団疎開に連れて行って貰えなかったのである。

次に集団疎開。疎開児童代表は「これが私達小国民の出陣であり、私達学童の武装であり、お国への一番の御奉公だと思ふと淋しいとか嫌だとかいっている秋ではありません」と述べて疎開地に向かった。しかし実際の疎開で、印象に残っていることとして、ある男児は虱と食事をあげる。「着衣についたシラミの多かったこと。…丸々とシャツの中をごそごそとはいまわる。今日は10匹、

明日は12匹が目標と、殺しても殺しても出てくるシラミ。殺した数を自慢しあったものである。食事当番に当たった時には、各テーブルに配膳する食事も、自分の器だけには強く飯を盛り込む技能が身についたものである。」

ある付添教員は詩吟をやってみせたり、日本刀で居合抜きを披露したり、クラリネットを吹いたりと、子どもたちを慰めた。「家族の面会も嬉しく待ち遠しいことであった。私は祖母や母が来てくれたと思う。面会の時のお土産のおやつは、いつも全部三十六に分けて戴いた」。この班は36人いたので、面会時のお土産は36人で分けるルールにしていたのだろう。「家から送られて来る小包に、食料品が入っていると先生に提出し、皆に配るという規則だった」という。

しもやけの思い出。「ここは神戸と違って、冬とても寒いところで、私の一番の思い出は足首がしもやけになったことです。今もその傷跡が残っているのですが、それはそれはつらい事でした。…保健室の金崎先生にも治療の為に何回も津山市の病院に汽車で連れていっていただき、ほんとうにお世話になりました。」山手国民学校は看護婦の資格を持つ職員を疎開の付添に加えていたのである。別の男児も「栄養失調だったので手足に霜焼けができやすく、それがひどくなって、誕生寺駅から汽車に乗って津山市の砂田病院に毎日通うことになった。」汽車のデッキで加藤隼戦闘隊の歌を歌って、「親から遠く離れた集団疎開生活のさびしさとひもじさを、大声で唱って吹っ飛ばそうとした」という。

受験勉強の思い出。「受験が近づくと夜の12時頃まで勉強で『神戸にいると警報ばかりで、こんなに勉強できないが、ここは先生が付きっきりで君たちは幸せ者だ』と故樋口東朔先生に言われたものである」という思い出もある。

山手国民学校の文集は各人が思い思いに書いているため、かえって縁故疎開を含め疎開の実態を表しているように感じられる。[10]

4　おわりに～記憶の変容

疎開日誌は疎開の日々の記録であって、記録すべき項目があらかじめ決められている。献立、学習、奉仕作業などについて事実の記録として客観性が高いし、教員がどのように地域と交渉していたか、子どものためにどのような努力したのか、などがよくわかる。それでも日誌には記録者の感情も入っている。しかしその感情は、記録者である訓導の意識として重要なものでもある。鶴見俊輔は吉田満『戦艦大和ノ最期』についてこう言っている。「日本文学のひとつの古典として歴史に残るでしょう。その偉大さは、この作品のうちに何ら戦後性の痕跡をもとどめていないということにあります。」鶴見の口吻をまねていえば、山手国民学校の疎開日誌は戦時下の訓導の意識をそのまま反映しているといえるのでないか。皇民教育に挺身していたとはいえ、児童の父親の死に際しては「共に悲しみ共に語る」のであった。付添教員として疎開に参加した教員たちが戦後の教育を担っていくことになるのである。[11]

長楽国民学校の疎開写真は、まとまった疎開の記録写真として貴重である。写真を裏書きする記録がないのが残念である。疎開の写真については、まだまだ収集していくことが必要だろう。それによって疎開の実態の解明につながるだろう。

集団疎開に参加した児童は共通の、あるいはよく似た体験をする。空腹、貧しい食事、下痢、寒い宿舎、霜焼けやあかぎれ、虱、苦しい作業、疎開地での受験勉強、親との面会など。これらの共通体験は容易に類型化されうるものである。戦後40～50年を経過すると学童疎開の歴史的評価、社会的評価は定着する。歴史的評価が想定する範囲内での記憶・回想が多いように思える。戦後10年位の記憶は赤裸々で生々しい。児童の記憶も教師の記憶もそうである。西須磨国民学校の座談会の司会者などは歴史的評価の範囲で記憶を整理し類型化しようとしている。かえって寄稿者が自由に書いた山手国民学校の文集の方が疎開の実態をよく表していないだろうか。[12]

縁故疎開はケースがさまざまであって、集団疎開に比べてとらえにくい。農村になじめない、いじめられたといったところが共通体験であろうか。縁故疎開は転校して一人で地域の学校に通うので集団疎開よりも児童が孤立している印象がある。また親戚の家に疎開したとはいえ必ずしも安心で

きる生活が保証されたわけではない。縁故疎開はもっと資料を収集することが必要であろう。

本稿執筆にあたって資料の閲覧、写真の複写等に格別のご配慮を頂いた神戸市立駒ケ林小学校の藤田昌央校長、神戸市教育委員会文化財課丸山潔氏、神戸市立山の手小学校の井口佳代子前校長に感謝する。また本文で紹介した長楽国民学校の疎開写真が旧二葉小学校跡地の神戸市地域交流センターで展示できることになった。学校に眠っていた貴重な写真を展示できることは本当に喜ばしいことであり、集団疎開という忌まわしい時代を思い起こすことになればと願うものである[13]。

（注）

（１）神戸市の学童疎開の最近の研究として、さしあたり洲脇一郎「神戸市の学童疎開と教員」（神戸親和女子大学『児童教育学研究』第34号、2015年３月）、石田敏紀・鳥取県『鳥取県への学童疎開』（2015年）がある。洲脇論文は学童疎開の神戸市全体の状況を明らかにするとともに、教員の役割を西郷国民学校、山手国民学校について調査したものである。石田は鳥取県への疎開を、受け入れ側の視点から明らかにしている。

（２）二葉国民学校の疎開日誌は鳥取県船岡町『戦時学童疎開　五十周年記念誌』に収録されている。女子24名の宿舎となった柳屋旅館での記録であり、1944年９月19日から45年４月２日までが記録されている。日誌の記載内容は、「健康状態」「食事」「来信」「発信」「備考」などであり、山手国民学校とは書式が異なっている。付添訓導は小林秀子20歳であった。志里池国民学校の引率訓導であった玉本格氏の日誌のごく一部が日高町『日高町史』（1983年）に収録されている。この日誌は所在が確認されていない。玉本氏の日記は個人的な日記であり、公的な記録である「疎開日誌」とは区別されるが、感情の表出が公的記録以上にあり得ただけに所在不明は残念である。

（３）「疎開記録　神戸市山手国民学校」は疎開から神戸に帰って間もない時期に編集されたと思われる。山手国民学校全体の疎開の記録である。

（４）出石町史編集員会『出石町史第２巻』（1991年）652～654頁。

（５）神戸市立志里池小学校『創立二十周年記念』（1957年）。

（６）神戸市立真陽小学校『七十年のあゆみ』（1956年）。

（７）川池小学校『川池のあゆみ』（1956年）。

（８）雲中小学校『創立八十周年記念　雲中　「いさご」特別号』（1954年）。

（９）西須磨小学校百周年記念事業実行委員会『西須磨小学校百周年記念誌　西須磨の年輪』（1992年）。

（10）山手一九会『楠の木陰に』（1995年）。

（11）鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』（岩波現代文庫、2001年）192、193頁。鶴見はこうも語っている。「戦争体験が、生む力としてはたらくのをはばむ第二の条件は、これは日本の伝統といってもいいと思うが、社会心理的な習慣で、一種の告白癖とそれを支えている素朴リアリズムである。…必ずしも戦争体験の意味を汲み取るという姿勢を持っていなかった。戦争体験は体験としてだけあって、思想的エネルギーには転化しなかった。」（久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』、岩波現代文庫、261～264頁）同じようなことが学童疎開にもあてはまるかどうかは慎重に検討されなければならない。疎開児童の視野はもちろん自分の生活の範囲に限られているし、教員も自己の戦時下の教育の責任については沈黙している。赤裸々な思い出も多くは素朴リアリズムの域を脱していないだろう。また現在においても小学校の教員が学童疎開について教えるときに、あまりにも知識が乏しいままで教えているのではなかろうか。自分の勤務する学校の歴史についての関心があまりにも低いのである。そういう教員が行う平和教育とはいったい何であろうか。なお、成田龍一『「戦争体験」の戦後史　語られた体験/証言/記憶』（岩波書店、2010年）は、体験、証言、記憶と整理して、戦争の語りの変容に迫っている。

（12）紙幅の関係で取り上げられなかったものに、神戸市立摩耶小学校同窓会『創立七十周年記念誌　摩耶70』（1999年）、潮見一雄編『学童疎開追想』（1995年）などがある。

（13）洲脇一郎・藤田昌央「写真が語る学童疎開～長楽国民学校」（2016年３月）は写真展の展示解説である。